

幼児教育における e ポートフォリオの設計

田中洋一^{*1}, 中尾繁史^{*1}, 増田翼^{*1}, 森本康彦^{*2}

^{*1} 仁愛女子短期大学, ^{*2} 東京学芸大学

Designing the e-Portfolio for Early Childhood Education

Yoichi TANAKA^{*1}, Shigenori NAKAO^{*1}, Tsubasa MASUDA^{*1}, Yasuhiko MORIMOTO^{*2}

^{*1} Jin-ai Women's College, ^{*2} Tokyo Gakugei University

学習者自身がオーナーシップを持つ e ポートフォリオを幼児教育に導入した場合、保護者及び保育者がどのように支援して、幼児自身がセレクトするショーケース・ポートフォリオを作成すべきか。また、この e ポートフォリオを小学校以降の生涯学習へ、どのように繋げていくべきなのかを考察する。本稿では、これら幼児教育における e ポートフォリオの設計に関して報告する。

キーワード: e ポートフォリオ, 幼児教育

1. はじめに

筆者の田中及び森本は、教育分野における e ポートフォリオに関する研究を行っている。生涯学習の学習支援ツールとして e ポートフォリオを考えた場合、小学校から高齢者までの活用法は設計しやすいが、幼児教育での活用法の設計が難しいと考えている。

また、筆者の田中は、幼稚園における視聴覚教育の助言者や保育者向けの教員免許状更新講習「教育の情報化(幼稚園編)」の講師を務めている。共著者の中尾は、福井県永平寺町の園にタブレットを貸与し、コンサルテーションに活用している。増田は、幼児教育学・教育学を専門分野としている。

学習者自身がオーナーシップを持つ e ポートフォリオを幼児教育に導入した場合、保護者及び保育者がどのように支援して、幼児自身がセレクトするショーケース・ポートフォリオを作成すべきか。また、この e ポートフォリオを小学校以降の生涯学習へ、どのように繋げていくべきなのかを考察する。本稿では、これら幼児教育における e ポートフォリオの設計に関して報告する。

2. e ポートフォリオとは

2.1 ポートフォリオとは

「ポートフォリオ」とは、元々、紙挟み・折靱の意であり、大辞林 4.0 によると「①携帯用書類入れ。②写真家やデザイナーなどが自分の作品をまとめたもの。③経済主体(企業・個人)が所有する各種の金融資産の組み合わせ。④ポートフォリオ-セレクションの略。」である。

プーケットとブラック(1994)は、『ポートフォリオとは、学習者自身に(あるいは他者に)、ある一定の領域におけるその学習者の学習に対する努力、進歩、達成を示すために目的を持って収集されたもの』とし、この収集物には、学習者が参加して選んだ作品、選択の基準、よさを判断する基準、振り返り活動を行ったことの証拠などが含まれるべきとしている。ポーターとクレランド(1995)は、『学び手が学習を理解することを助けるためだけでなく、読み手にも役立つ学びと学び手についての洞察を与えるように促す、省察的な話を伴った作品など(artifacts)を集めたもの』としている。ジョーンズとセルトン(2006)は、共通的な

定義として、『ポートフォリオは、自身の学習、スキル、業績を実証するためのあらゆる成果を、ある目的のもと、組織化／構造化しまとめた収集物である。』とした。そして、学習のプロダクトとしての成果物は、一連の学習や活動の最後の結果物にすぎないと指摘し、学習者がポートフォリオをつくりだすプロセスと継続的なリフレクション（省察）の重要性を併せた強調した。

2.2 e ポートフォリオとは

e ポートフォリオとは、広義では「電子的な形式で扱われたすべてのポートフォリオ」であり、狭義では「ポートフォリオを作成するためのソフトウェア、またはシステム」である。また最近の教育分野における e ポートフォリオの定義は、「学びの促進・支援のために利活用することを目的に、学習プロセスにおいて収集できうるあらゆる学習エビデンスを、情報技術を用いて継続的に蓄積した電子データ」とされる。

ズビザレタ（2004）は、ポートフォリオを活用した学習には、3つの重要な要素が不可欠であるとし、図1のモデルを提案している。①リフレクション（振り返り・省察）、②ドキュメンテーション（文章化・引証付け）、③コラボレーション（協働）／メンタリングからなり、「リフレクション＋ドキュメンテーション＋コラボレーション／メンタリング＝学び」と記し、①～③がお互いに働きあうとき、ポートフォリオを活用した学習が最大限に引き出され、有効かつ効果的に機能するとされる。

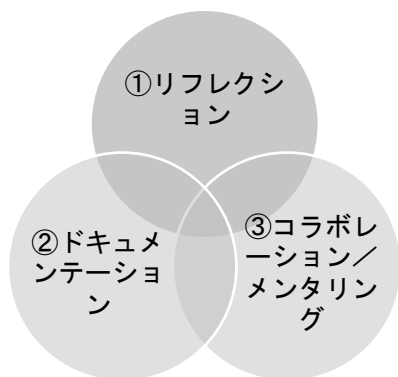


図1. ポートフォリオ活用学習の必須要素

レイノルズとパットン（2014）は、e ポートフォリオを活用した深い学びを引き出すためのモデル(図2)

を示した。学習者は、学習プロセスを通して、絶えず学びを「振り返る（Reflect）／つなげる（Connect）」ことで深い学びとなる。その際には、「収集する（Collect）」-「選択する（Select）」-「つくる（Create）」-「伝える（Communicate）」-「再編集する（Re-create）」の5つの段階を経ることを提案している。

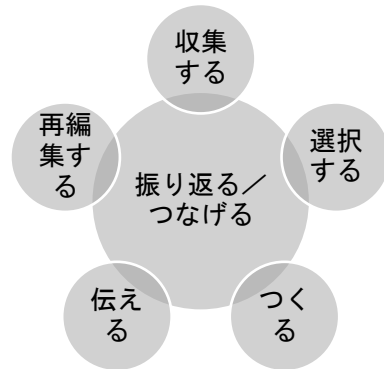


図2. e ポートフォリオを活用した深い学習プロセス

e ポートフォリオは、高等教育においてパフォーマンスを評価（アセスメント）する際に、よく活用される。アセスメントは、目的によって3つに分けられる。1つめは、「学習のアセスメント（Assessment of Learning）」であり、資格・成績等の判定に使われる。2つめは、「学習のためのアセスメント（Assessment for Learning）」であり、教員や機関が教育活動を決めていくための情報収集に使われる。3つめは、「学習としてのアセスメント（Assessment as Learning）」であり、学習者の自己モニタリングや自己調整に使われる。

中教審答申のために導入された高等教育機関の e ポートフォリオや高大接続改革のために開発された JAPAN e-Portfolio では、e ポートフォリオというよりも電子カルテ的な運用も多い。本来の e ポートフォリオは、教職員が管理する学習管理システム（LMS）や教務システムとは異なり、学習者自身がオーナーシップを持つべきである。

3. 幼児教育における現状

幼児教育における e ポートフォリオの現状を考えてみよう。まずは、2021年度の日本保育学会第74回大会発表論文集から関係する研究を取り上げる。

1 つめの事例は、岩手インフォメーション・テクノロジー社との協力で開発した「おがスタ」を用いた ICT 活用に関する井上ら（2021）の自主シンポジウムやポスター発表である。クラス・場所・年齢・季節・5 領域・3 つの柱・育ててほしい 10 の姿・コメントを付加した写真を共有することにより、保育者のリフレクション、スーパーバイズやコンサルテーションを行い、保育の質向上を図る研究である。この実践研究も大変興味深い、保育者のための e ポートフォリオであり、幼児がオーナーシップを持つものではない。

2 つめの事例は、ファミリー・ポートフォリオ等に関する堀田（2021）らの自主シンポジウムである。本発表は、佐藤（2020）が研究代表者を務める 2017～2019 年度の科研費・基盤研究（C）「学びのポートフォリオ共有による園と保護者の連携に関する研究」に関連した研究である。本研究は、保護者が子どもと向き合い、リフレクションを促す家族対話を引き出すことをねらいとしている。本研究はフォリオシンキングの概念も用いており大変参考になるが、オーナーシップが幼児というよりは保護者の e ポートフォリオである。

その他、レッジョ・エミリア・アプローチのドキュメンテーションやニュージーランドのラーニングストーリーに関する発表もあったが、筆者らの視点とは少し異なっていた。

4. おわりに

先ほどから e ポートフォリオのオーナーシップは、学習者の幼児であるべきだと述べているが、小学生高学年以上とは異なり、幼児自身が作品等（artifacts）を「収集する（Collect）」ことは難しい。そのため、e ポートフォリオ学習プロセスの「収集する（Collect）」は保育者及び保護者が担当し、「選択する（Select）」を幼児が行うポートフォリオサイクルを考えている。収集された写真（作品や活動の artifacts）の一覧をタブレットで閲覧し、ある観点（たとえば、この 1 ヶ月で自分が頑張ったことを 3 つ選択）でタップしていくイメージである（図 3）。また、選択した写真に音声メモを付記することも可能かもしれない。これから、永平寺町の園と相談し、本研究を試行していく予定である。

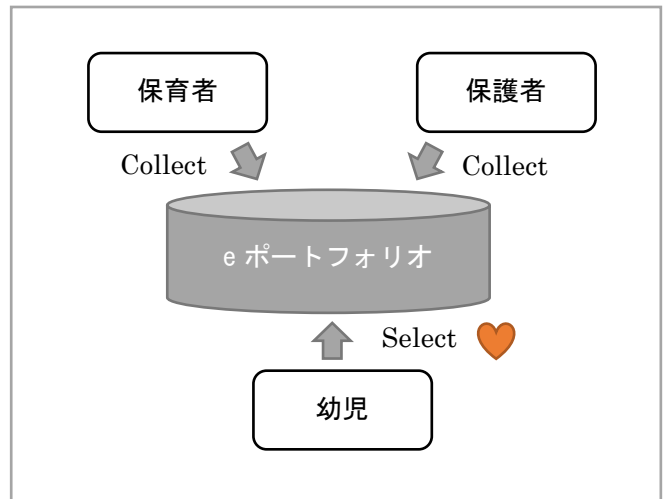


図 3. 幼児用 e ポートフォリオ案

参考文献

- (1) 森本康彦ら：教育工学選書Ⅱ“教育分野における e ポートフォリオ”，ミネルヴァ書房（2017）
- (2) 井上孝之ら：“保育の質向上のための ICT の活用”，日本保育学会第 74 回大会発表論文集，J13-J14（2021）
- (3) 堀田博史ら：“幼児教育での ICT 活用の効果と課題”，日本保育学会第 74 回大会発表論文集，J43-J44（2021）
- (4) 佐藤朝美：“学びのポートフォリオ共有による園と保護者の連携に関する研究”，科学研究費助成事業 研究成果報告書（2020）